

「言語活動」に着目した俳論教材の活用について

—『去来抄』『岩鼻や』の章段における交流活動を用いた実践授業をもとに—

寺 島 徹
Toru TERASHIMA

樋 口 敦 士^{*1}
Atsushi HIGUCHI

Making Works of Classical Poetry into Language Teaching Materials: Based on Sections from “*Iwahanaya*” from the Text on *Basho* Haiku Theory “*Kyoraishou*”

現行の高等学校学習指導要領において「言語活動」の充実がますます求められていることは改めて言うまでもない。国語科としては古典の韻文作品における評論教材がまさに「言語活動」プログラムに適したものであると判断されるため、今回はその指導法の提案及び実践授業を通しての分析と考察を試みた。具体的には俳諧分野を単元教材として取りあげて批評を用いた指導法の開発について実践授業をもとに検証したい。また、韻文創作活動の新たな手法にも着目しながら、高等学校国語科の「言語活動」教材の理論化を目指す。韻文作品に向けられた俳論の読解を通じて、一つの句に対してのさまざまな意見をグループで話し合うことにより、他者への評価という視点を生徒がメタ的に感じ取ることが可能な教材となることが想定される。

1 実践の目的と教材について

松尾芭蕉の弟子向井去来の記した俳文『去来抄』は蕉門俳人の評論として名高い。現行の教科書においては「行く春を（近江の人と惜しみけり）」と「岩鼻や（ここにもひとり月の客）」の二篇が多く採録されており、定番教材の一つである。

「岩鼻や」の梗概については下記の通りである。去来が詠んだ「岩鼻やここにもひとり月の客」句に対して、同門の洒堂から句末を「月の猿」と改変することを提案されたという一連の事情について師の芭蕉に話したところ、芭蕉は「もってのほかである」と一蹴したうえで、去来自身の創作意図を問いただす。芭蕉の読み方は「月の客」を「自称（一人称）」と捉えながら、「この岩鼻にも私のような風流な客がいますよ」と名乗り

^{*1} 狭山ヶ丘高等学校教諭

出るといふものであった。去來の述懐には作者である自分にすら気づきえなかつた師の鑑賞眼の深さに感服した次第が綴られている。いくつかの視点から捉えれば、「岩鼻や」の教材は単なる読解教材にとどまらず、多くの「言語活動」的な要素を含んでいることも考えられる。

俳文学の教材的な価値は既に盛んに言われてきているが、「岩鼻や」章段について長尾高明氏（1974）は「①歌論俳論などの文芸評論に触れさせることは生徒の思考力・鑑賞力を高める上で極めて有意義である。②作品にも比較的親しみやすい面があり、なおかつ理解も具体的実証的な面がある。③文学一般の鑑賞・批判に関する態度と観点を知り、表現論としての要素にも着目させられる」と指摘している。「岩鼻や」が鑑賞教材として様々な要素を内包していることは明らかであるが、当該の章段を「言語活動」に着目して組み立てた実践はこれまでにほとんど報告がない。こうした点を踏まえながらも今回の実践では次の2点に着目した。

1点目は、自己評価と他者評価の違いである。作者去來と読者芭蕉の解釈の違いがどこにあるかを踏まえさせることで、「読者論」の観点にまで発展させることも可能になるだろう。作品は作者の手から離れたことで読者の手に渡り、作者の創作意図に拘束されることなく自由に読者に提供される。特に俳文学では限られた字数で表現された文芸を読者がいかに鑑賞しえたかに力点が置かれる。師「芭蕉（読者）」と弟子「去來（作者）」とのやり取りを通して読者優位の実態についても鑑賞させたい。作者の意図と読み手の解釈のどちらの方が生徒に共感を持つかは実践の結果が待たれるところである⁽¹⁾。

2点目は、「もじり句」を用いた創作と鑑賞である。ここでいう「もじり句」とは、去來同門の酒堂が提示した「月の猿」改句案を指す。結果的に芭蕉によって一蹴されてしまったが、既成の句に手を入れて新しい命を吹き込むといった一連の作業は、楽しみながら作品を受容していく点で大変有効な手段となりえるのではないだろうか⁽²⁾。もちろん、これは恣意的な試みではなく、芭蕉自身が句の推敲・変奏を試みたことは、よく知られるところである。たとえば、芭蕉は、元禄三年の琵琶湖畔での月見の折、「名月や座に美しき顔もなし」の句をなすにあたって、大胆な発句の変奏を試みている（『三冊子』赤双紙9-18等）⁽³⁾。初案は「名月や児達双ぶ堂の縁」、再案は「名月や海にむかへば七小町」という改変がなされたのであるが、古典を下敷きにした初案、再案に対し、治定した句は実景描写の色彩の濃いものとなっている。推敲というにはあまりにも大胆な改変であるが、このような変奏とも呼ぶべき大幅な変遷を経たからこそ、名句が生まれたことが予想される⁽⁴⁾。既に完成した句を生徒たちが「変奏」し、検討するという作業は生徒にとって関心を惹くものとなろう。彼らが「岩鼻や」句のどのような点に着目して改変しているのか今回の実践を通して考察を試みる。

2 「言語活動」に着目した創作・鑑賞の実践―「読者論」と「もじり句」を中心に

前項の2点に着眼し、『去来抄』「岩鼻や」句を取りあげ、文系に在籍する高等学校3年生において「言語活動」に着目した創作・鑑賞を実践し、その効果を検証した（3クラス・計81名）。本実践は2時間で構成されており、1時間目には本文解読による去来と芭蕉の解釈の相違点についての話し合いを行い、2時間目は「岩鼻や」俳諧の「もじり句」の創作及び鑑賞をさせる流れとなる。以下に「学習のねらい」と「手順」を掲げる。なお当該生徒が使用する教科書（第一学習社『古典B』）には「岩鼻や」の単元が採録されていないため、手製のワークシートを用意した。煩雑さを避けるために、実践した3クラスのうち1クラス（3年H組）について詳細を記載する。

（実施日・対象人数）

（実施日）平成28年6月14日（火）1時間目／6月16日（木）2時間目

（対象人数）37名（男子15名・女子22名）

（学習のねらい）

- （一） 俳諧作品（定型句）を取りあげて、その効果的な演出の方法を考えさせる。
- （二） 創作した俳諧作品を互いに鑑賞し合わせることで、聞く力、話す力を涵養する。
- （三） 自己評価と他者評価の違いについて捉えさせる。

（手順）

【1時間目】

- ① 本実践の流れの説明。本文の音読。（2分）
- ② 辞書を引きながらの自力読解。（10分）
- ③ グループで座らせて互いの読み方を話し合わせた後で指導者による本文解説。（5分）
- ④ 去来、芭蕉の鑑賞眼の違いについてのグループ討議。（20分）
- ⑤ 自席に戻り、波線部箇所（どうして芭蕉の解釈が勝るのか）の検討。（10分）
- ⑥ まとめ。次回の授業の告知。（3分）

【2時間目】

- ① 「岩鼻や」句をもじった俳諧創作。（15分）
- ② ペアを作り、自作の発表及び相手の感想を聞く。（25分）
 - ・ ジャンケンで発表の順番を決める。
 - a. 1人目の発表（1分） b. 1人目に対するコメント（1分） c. 2人目の発表（1分） d. 2人目に対するコメント（1分）
 - ・ （席替え）ジャンケンをして負けた方が席を移動。（この作業を5～6回繰り返す）

す)

③ まとめ。事後アンケート。(10分)

それでは、実際に設問を付した『去来抄』「岩鼻や」のワークシートを下記に付す(模範解答例及び生徒の回答例についても枠内に記載する)。

【1時間目 「岩鼻や」解釈論についての検討—去来と芭蕉の視点の違い—】

『去来抄』(一時間目用プリント)

岩鼻やここにもひとり月の客 去来

※先師上洛の時、※去来曰く「※洒堂は此の句を『月の猿』と申し侍れど、予は『客勝りなん、と申す』いかが侍るや。」先師曰く「猿とは何事ぞ。汝、此の句をいかにおもひて作せるや」。去来曰く「明月に乘じ山野吟歩し侍るに、岩頭又一人の騒客を見つけたる」と申す。先師曰く「『ここにもひとり月の客』と、己と名乗り出でたらんこそ、幾ばくの風流ならん。ただ自称の句となすべし。此の句は我も珍重して『※笈の小文』に書き入れける」となん。予が趣向は、猶ほ二三等もくだり侍りなん。先師の意を以て見れば、少し狂者の感も有るにや。

退きて考ふるに、自称の句となして見れば、狂者の様もうかみて、はじめの句の趣向にまされる事十倍せり。誠に作者そのところをしらざりけり。

※先師…松尾芭蕉のこと。 ※去来…芭蕉の弟子、向井去来。本文の作者。「予」も同じ。 ※洒堂…浜田洒堂。芭蕉の弟子。 ※『笈の小文』…芭蕉自選の俳諧作品集。

《語句調べ》

○岩鼻 () ○上洛 () ○吟歩 () ○騒客 () ○狂者 () ○自称 ()

最初に10分間程度時間をとって本文解読を通して古語辞典で単語の意味を調べさせながら、「岩鼻や」句の解釈について考えさせた。「岩鼻やここにもひとり月の客」という句は「岩鼻や」の部分だけの意味さえ押さえさせれば特段難しい内容ではない。ただし、解釈しやすいからといって必ずしも一つの捉え方に限定することができるわけではない。つまり、いくつかの読み方を誘う内容であることはこの句の特徴である。

《自力読解》

① 「岩鼻や」の句の解釈

岩頭に出てみると、ここにもひとり月に誘われて出てきた詩人がいるのだなあ。

「月の客」という点であるが、これを全ての生徒が「先客」と捉えていた。去来句に対して芭蕉が指摘したような読み手自身を指すと解釈した者は見受けられなかった。先行研究には「自称」を「一人称」とする説や「自慢、誇示」とする説があるが、生徒の回答からは後者の「自慢、誇示」と捉える向きは少なかった。①について自身の解釈が完成した後、3～4人のグループに座席を配置して②～④の項目について話し合わせることにした。内容把握を踏まえてグループ内で互いの解釈を出し合いながら、内容理解を深めさせることを狙った。ここでは特に去来と芭蕉との内容の違いについて考えるように強調した。

《グループワーク》

② 去来の創作イメージ（「月の客」とは誰か）

月のきれいな夜、岩頭のところに先客が来ていた。

③ 芭蕉（先師）の意見（「ここにもひとり」は誰のことか）

読み手自身。

④ 波線部の理由はどこにあると思うか。（生徒の意見）

- ・ 去来のイメージでは景色を詠んだだけであり面白みもなく、自分で名乗ったとする方が風流に夢中になっており意外性がある。
- ・ （去来句の）二人よりも（芭蕉句の）一人の方が詩に没頭しているイメージがあり、固定した価値観から新しい世界観を呼び込んでいる。
- ・ 岩鼻自体を情景ではなく先客と見立てることで、ただの人間ではなく月の存在感がいっそう大きなものになる。

グループワークでは去来と芭蕉の鑑賞観の違いを考えさせた。初読の際には、生徒は去来的な解釈をしていたが、芭蕉的な解釈を話し合わせることで深みが増していることを感じ取っていたようだ。ただし、注1に掲げた村松友次氏（1993）の指摘のような「月の客」を「猿」と捉える生徒は皆無であった点には留意しておきたい。さらに、本実践を通して一つの句をめぐる二通りの解釈がなされている経緯を確認しながら俳諧の読み方の多様性を実感していたようである。ワークシートには両者の解釈の違いを図示させるためにイラスト欄を設けた。両者を描き分けることで生徒たちも内容の違いを理解していたことが窺えた。ここまでの1時間目の実践である。

【2時間目 「もじり句」の創作と鑑賞—洒堂の提案に着目して—】

前回の解釈の違いに留意させながら、「もじり句」の創作と鑑賞の実践となる。先述したように、洒堂の「月の猿」案については師の芭蕉によって「猿とは何事ぞ」と一蹴

されているため、さほど意に留めることはないまま先に読み進めてしまうことだろう。しかし、今回あえてこの作業に着目した。生徒に原句をもじらせることでどのような意味が付与されるのか、また彼らがどこに配慮しているのかを探ることは意味のあるものとなろう。まず、15分間で原句の文言を踏まえて創作するようにと促し、どの点が自身の句のアピールポイントであるのかも考えさせた。実践した3クラスのうち、「もじり句」、「創作句」の二つの指導方法を使い分けながら、その効果を検証した。「もじり句」、「創作句」の順に確認したい。

『去来抄』（2時間目用プリント）

※去来句を部分的に変えてみよう

岩鼻や ここにも ひとり 月の客 去来



（作品「A句」）岩鼻や そこにはふたり 月の客 （女子）

アピールポイント（どの点がポイントであるのか・相手に表現したいこと）

- ・（去来のオリジナリティーは残しつつ）去来の句で出会った二人を恋愛に発展させてみました。ロマンティックな感じ。

（作品「B句」）砂浜や ここにもひとり 海の客 （女子）

アピールポイント（どの点がポイントであるのか・相手に表現すること）

- ・砂浜でひとり海を眺めている様子。砂浜で親しみやすさを出した。

「もじり句」の作成に続き、25分間で創作句の発表及び鑑賞の実践に入った。上記のA句は「人数」、B句は「場所」に着目したもじり改変がなされていることがわかる。「もじり句」の完成後、今度は2人組で座らせた。1分間で自身の作品の発表をした後、1分間で相手からの評価を聞いて書き取るという作業（ペアワーク）を交互に行わせた。その後ジャンケンをして負けた方が別の席に移動して新たなペアで組む流れにした。これを5～6回繰り返した。A句、B句のそれぞれの寸評は以下の通りである。

作品「A句」への寸評（他者の評価を聞こう）

- ・理想のデートです。 ・ロマンティック。2人のシルエット。
- ・もともとの歌の意味を残しているため、素晴らしい。

作品「B句」への寸評（他者の評価を聞こう）

- ・月もよいけど海も良い。 ・楽しそうだった。 ・岩鼻に比べると堅苦し

- くない。 ・自分が海の客なんだっていうのがわかりやすくいいと思った。
- ・砂浜と海で共通している感じでより親しみやすさを感じた。

A句は恋愛の趣向を借りながら、「ふたり」という点に含みを持たせている。月をシルエットにしてロマンチックな内容に見立てている。また、B句は「海」という場所に変えることで広々とした内容に仕立てており、秋から夏へと季節も変えていることが読み取れる。傍線部を付した箇所には「岩鼻や」との比較考察した寸評も見られ、原句への意識がはたらいっていることが明らかである。本実践を通して生徒は各自創作、発表に自主的に取り組み、発表後は相手からの寸評を聞くことを楽しんでいた様子だった。

今回の実践は3クラスによる実践だったが、「もじり句」の効果を検証するために、1時間目の「解釈論の鑑賞」の後、うち1クラスでは「もじり句」ではなく、通常の俳句創作を行わせることにした。原句の趣向を借りて、テーマ「秋の夜道を散策して」（季語「秋」）で作成するように指示したところ、生徒も思い思いに句作に取り組んでいた。その作品は下記のものである。

- ・秋の月夜道を照らす午前二時
- ・月光りすすきを照らす秋風と
- ・秋風に揺れるもみじを照らす月

上記の創作句の方は、季語の「秋」を直接入れている点と月を中心とした自然を強調するあまり中心人物が捨象されてしまっている点が共通している。つまり、『去来抄』「岩鼻や」を踏まえるようにという指導は加えたものの、最終的には全くの別趣向の作品ができあがった点には注意を要したい。つまり、指導者側からの「もじり句」の要請がなければ、結局は単なる普通の俳句作りで終わってしまうことになり、原句との比較が踏まえられない形となる現状が浮かび上がった。結果的に「もじり句」の作成は俳文鑑賞に際しては有効な手段となり得ることが検証できるものと思う。

3 事後アンケート

『去来抄』「岩鼻や」の読解を通じて「もじり句」、「創作句」を行ったいずれのクラスにおいても実践後には同じ項目の調査を取った。質問項目と回答結果については以下の通りである（対象81名・数字はそれぞれ割合と実人数（カッコ）を示したものである）。

- ① グループワークを通じて『去来抄』の内容の理解が深められたか。

はい 86% (70) ・ いいえ 14% (11)

(感想)

- ・一つの句について複数の解釈が認められていることを改めて知った。

- ・必ずしも作者が最善の読みをしているわけではなく、鑑賞する者の手に委ねられていることがわかった。
- ・改めて芭蕉の読みの深さについて知ることができた。

② 去来・芭蕉・洒堂の句の解釈について一番共感したものはどれか。

去来 38% (31) ・芭蕉 58% (47) ・洒堂 4% (3)

(理由・去来)

- ・自分の読み方と同じであったから。
- ・自分もこのように名乗り出るタイプではないから。

(理由・芭蕉)

- ・この解釈の仕方が一番風流だと思ったから。
- ・月に向かい合っている構図にすることで句の印象がいっそう際立つから。
- ・自己を名乗り出ることによって傍観者ではなくなることになるから。

(理由・洒堂)

- ・猿がいきなり出てくるのが印象的だったから。

③ 本文『去来抄』読後の芭蕉のイメージはどのようなものになったか。

- ・芭蕉の句のレベルはやはり高いものであることが実感された。
- ・これまでは作者の作ったものを受け入れていただけだったが、去来ですら気づかなかった読みを提示できているのは芭蕉の凄さであると思った。

④ 自作の句を人に批評してもらおう今回の実践の感想及び反省点を自由に述べよ。

(感想)

- ・句を発表するだけでなく、コミュニケーションもしっかりと取れた。
- ・みんな考えが様々であることがわかった。
- ・作品を褒めてもらえて照れくさいながらも嬉しかった。

(反省点)

- ・もう少し相手に伝わるような表現の工夫をすればよかった。
- ・他の人と似たような内容の句になってしまった。
- ・季節感のある言葉をもっと知っておけばよかった。

⑤ 自己評価と他者評価の違いについて自由に述べよ。

- ・句を作った自分よりも相手の評価の視点の違いを十分に感じ取ることができた。
- ・発表の際の自己のアピールがスムーズにいくと、他者評価を自己評価に近づけられることがわかった。
- ・自己評価には制限があるが、他者評価は無制限であることを実感した。

⑥ 『去来抄』の文章の読みやすさはどうであるか。

大変読みにくい 4% (3) やや読みにくい 32% (26) ちょうどよい 44% (36)
やや読みやすい 17% (14) 大変読みにくい 2% (2)

事後調査①より大半の生徒が今回の「言語活動」を実践することで、『去来抄』「岩鼻や」の内容をしっかりと理解することができたと答えている。互いに生徒が読みを持ちよって話し合うことにより複数の視点が生まれ、論旨の理解が深まることも明らかとなった。調査②からは、作者去来の解釈が一番自然であるという意見が多く寄せられた一方で、新たに提示された師の芭蕉の読み方に最も支持が集まる結果も明らかになった。これは作品が作者の手を離れて読者の手に委ねられることで、当該作品に対する評価も変わる現状について生徒自身が改めて体感したことを物語っている。作者の創作意図よりも読者側の気づきの重要性を訴える作品として『去来抄』のこの一文は教材として多くの意味を含んでいることが理解できるだろう。

事後調査④、⑤は創作活動の実践についてである。生徒からは作品創作及び発表について積極的に作品の発表ができたことを楽しんでた様子が見受けられたが、語彙の乏しさにより趣向が似通ってしまった点については各自で反省していた。「五七五」という限られた定型の韻文の中で、「もじり句」、「創作句」それぞれに類似句が多く生み出されてしまったことも生徒自身が実感したところである。作者去来と読み手芭蕉の解釈の違いについては、今回の実践を通してその視点の違いに改めて気づかされたことを口にしていった。この中には「懐かしさ」を詠んだつもりが「さみしさ」を詠んだものと捉えられたり、オシャレな句を作成したつもりがユーモアある作品と評されたりといった具体的な声も見られた。

調査⑥の『去来抄』の文体については「やや読みにくい」、「ちょうど良い」あたりに大半の意見が集まった。近世の俳文ということもあって文系クラスの高校3年生にとっては適した教材であったことがうかがえる。

4 実践の考察

今回は『去来抄』を用いて「自己評価（去来の創作意図）」と「他者評価（芭蕉の読み）」の違いを解説させる一方で、「もじり句」の創作及び鑑賞させるという「言語活動」の実践を行った。

まず、1時間目の作者と読者間におけるの解釈のズレについてグループワークを通して鑑賞させた実践について確認する。先行研究においては「自称」の句が一人称なのかどうか、誰に向かって何に対して名乗り出たのかに焦点が置かれている。指導者が解説

を施した後は、岩鼻に座っていた先客に対しての声かけと見る向きもあれば、月に向かって名乗り出たと読んだ者もあった⁽⁵⁾。こうした作者と読者の鑑賞眼の多様さ、すなわち「自己評価」と「他者評価」の差違については、『去来抄』の他の章段でもいくつか見られる。たとえば、芭蕉の「腫物に柳のさはるしなへ哉」（同門評1）の句について、柳が首の瘤にさわるといふ実景描写の句か、腫れ物にさわるといふように柳が揺れている比喩の句なのか、門人たちの間で意見が割れる場面がある。読者による多様な読みは、ロラン・バルトの「読者の誕生」や、外山滋比古の「読者論」の考え方にも繋がるものだが⁽⁶⁾、ただし、その一方で、芭蕉は、「…人々の腸をしぼる所、聞く者の好く好からざる物にとれて、言下に心ごとく聞きなし侍らんは本意なし」（『三冊子』わすれみづ14）と述べ、読者が他人の句を恣意的に解釈することに釘をさしてもいる。「岩鼻や」の章段でも、芭蕉自身は多様な解を認めているわけではないのである。生徒に対しても、創造的な多様な解の可能性を指摘する一方で、あわせて根拠をもって読む指導の必要性も確認すべきだろう。

また、こうした作者と読者の鑑賞眼の多様さ、すなわち「自己評価」と「他者評価」の差違について当該生徒は既に前年度、鴨長明『無名抄』「深草の里」を授業内で取り扱っていたため、テーマ自体についてはなじみがあった。「深草の里」は長明の師俊恵法師があるとき俊成入道のもとに出向き、その「おもて歌」について直接本人に確認したやりとりを述べた回想談である。俊成は自身の代表歌として「夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里」をあげたことに対して、俊恵は世の人が別歌を称賛する現状を指摘しながらなおも俊成の意見を求めたところ、俊成は世評はともかく自身の見解は変わらないと述べたとする一連のやり取りについて、長明ら弟子達に向けて内輪話の形で語りかけている。これは自他の評価の違いを浮き彫りにした單元であることは明らかであり、あわせて俊恵は主観的な表現（腰の句「身にしみて」）による効果の薄さを唱えている。この單元も振り返りをしていくことで、さらに『去来抄』「岩鼻や」本文の内容が生徒に深まっていくことが考えられる。今後、他の『去来抄』『三冊子』などの蕉門の俳論教材に加え、他ジャンルの評論教材との接続方法も積極的に検討していく必要があると言えるだろう。

2時間目は「もじり句」の創作と鑑賞の実践である。洒堂による「月の猿」への句末改変案は師の芭蕉により一蹴されたが、この一件に着目することで生徒たちに原句を踏まえた表現活動を実践させることが可能になるものと考えた。「岩鼻や」句には人数や具体的な場面が詠み込まれていることが着眼点の一つではあるが、既存の句をもじり変えることによりどの語の置き換えが可能になるのかを創作を通して考えさせることにした。実際に完成した作品を見ると、月に照らされた岩場の情景が恋人のいる舞台に変わっ

ていたり、場面を海に見立てながら季節を変えていたりと顕著な創意工夫がなされていた。生徒は原句との差違を際立たせることで作品のアピールポイントを見つめることができていた。アンケートによる事後調査からも今回の「言語活動」によって本単元の理解が深まり、積極的にコミュニケーションを取ることもできたと振り返っていた。創作した「もじり句」をペアで発表し合うことで互いの視点の違いについても身をもって実感していたことも明らかになった。授業の「ねらい」でも触れた「変奏」的な工夫を生徒たちなりに実践できていたようである。

さらに、相手に伝えるための効果的な表現（語彙・修辞など）の習得もはかっていきたいという声も寄せられた。近世俳文という文体についても高校3年文系レベルの生徒であれば辞書を使用しながらの読解に適した教材であることも明らかになった。

芭蕉の解釈は「岩鼻や」句中に作者が当事者として現れるものとしての読みを提示しているが、作者の創作意図を超越した鑑賞方法を指摘した芭蕉の存在は生徒にとっていっそう大きなものに映ったようである。これに対して去来もまた「退きて考ふれば」と芭蕉の解釈を全面的に受け入れていることである。「言語活動」の観点から眺めれば、このような謙虚に聞く姿勢もまた見落とすことはできないのではないだろうか。

「岩鼻や」一節を扱ったからといって、蕉門俳諧はおろか芭蕉の理念の一端に触れさせることも難しいというのが実情だろう。しかし、一つの俳諧をめぐる推敲過程や批評態度などを覗かせるといった幕内の仕掛けは、初心の高校生に対しても鑑賞眼を育成するうえでは大きな意味を持つものと言えるのではなからうか。『去来抄』所収のもう一つの定番教材「行く春を」には芭蕉が自句について、弟子の尚白から難ぜられた事情を去来に打ち明けてその意見を求めている。去来句を俎上に載せた「岩鼻や」とは立場が逆になるが、句の作成において蕉門の俳人たちが一文字をもゆるがせにしなかった真摯な態度を物語っている。一つの短詩句を取り出し、複数の視点から読み取るといった実証的な方法についてこのテキストを用いて鑑賞することができるはずだ。以上から『去来抄』「岩鼻や」の一文は、現在必要とされる「思考力、判断力、表現力」を養う観点からも「言語活動」に適した教材になることが結論づけられるだろう。

注

(1) 「月と猿」の取り合わせについて尾形侑氏は『和漢朗詠集』の「五夜之哀猿叫月」などの詩句や禅宗画の「猿猴図」あたりに着想を得たのではないかと推測している。また、芭蕉の句「初時雨猿も小蓑をほしげなり」の響みに倣うことを狙ったという見解も提示されている。村松友次氏（1993）では、この場面で月見をしている者が「人」ではなく「猿」であることは自明であり、猿の自称として「月の猿」ではなじまないで、「月の客」とした方が自然な表現であると指摘する。また、佐々木謙助氏（1957）において、「月」と「猿」の和漢詩文の用例

を多数掲げながら、我が国の「猿」は、悲壮感漂う漢詩の「猿嘯」とは異なり、古来より愛嬌あるもの、人間味あるものといったイメージがあったことを述べている。

- (2) 堀信夫氏（1983）には、「岩鼻や」句の原型として「又ひとりここにもあるや月の客」（『浪花日記』元禄五年）、「岩鼻やここにも月の客独り」（『三日月日記』稿本）が取りあげられており、作者の推敲の形跡も見られるという。こうした点からも去来本人も「岩鼻や」句が未完成であったと見なしていたふしもある。
- (3) 以下『去来抄』、『三冊子』の引用は原則、堀切・復本（2001）による。
- (4) 深沢眞二氏（2003）に、この一連の推敲と軽み論に関する精緻な論考がある。
- (5) 「狂者の感もうかみて」とあるからには月に対峙していると見た方が自然であるといった前掲堀氏による見解もある。当然の結果ではあるが、こうした研究者によって積み重ねられた深い読みの違いまでは生徒間のグループワークでは論議されることはなかった。しかし、生徒の描画には、深い読みを示唆するものも一部見られ、今後の検討が必要であろう。なお、指導者は、柔軟な指導に対応できる知識を備えておくべきである。
- (6) もとより、俳句はコノテーションの高い文芸であり、「いひおほせて何かある」（『去来抄』先師評25）という芭蕉の言葉からもわかるように、言い尽くさない表現にこそ、その本質がある。読者は当然その余白部分、いわば行間を読むことが必要とされるのである。「岩鼻や」の章段は、このような日本文化の本質に関わる教材として発展させられる可能性もある。

参考文献

- 佐々木謙助（1957）「一去来抄―「岩鼻やここにもひとり月の客」管見」（『解釈』3-11）pp.17-20
- 土屋博映（1991）「『去来抄』解釈試論―「岩鼻や」の句について」（学習院女子短期大学『国語国文論集』20号）pp.93-106
- 長尾高明（1974）『高等学校国語科教育研究講座』第10巻（有精堂）pp.72-79
- 深沢眞二（2003）「月見三句考―元禄三年の芭蕉」（『連歌俳諧研究』105）pp.1-9
- 堀切実・復本一郎校註（2001）『連歌論集・俳論集』（新編日本古典文学全集88 小学館）
- 堀切実（2011）『芭蕉たちの俳句談義』（三省堂）
- 堀信夫（1983）「たゞ自称の句となすべし「個」と「衆」と（去来抄）」（国文学28-1）pp.106-110
- 村松友次（1993）「去来抄「岩鼻の客」は猿（続考）」（『俳文芸』41）pp.23-31
- 湯沢賢之助（1977）「『去来抄』―俳諧への構え・風狂・本意」（国語展望47）pp.1-9
- 三木慰子（2013）『新版 蛙の大冒険―芭蕉から幼児教育にジャンプする』（文芸社）

[付記] この論文は、公益財団法人文教協会研究助成（平成28年度）による共同研究「言語活動」の核となる高等学校の韻文教材の研究とメタ認知的プログラムの開発」（研究代表者：寺島徹、共同研究者：加藤国子・樋口敦士）をもとに行った研究成果の一部である。